

お塔婆ってなんだろう？

とても身近なお寺との、そして仏教との関わりの一つに、お塔婆を頂きに行く、そしてお墓に建ててお墓参りをするという仏事があります。身近にある仏教的な慣習であるお塔婆、実は様々な深い意味があるのです。

お塔婆は「卒塔婆」、または「五輪卒塔婆」などとも呼称致します。そもその語源は、実は日本語ではありません。古いインドの言葉（梵語）で、「ストウーパ」という言葉があります。これは、仏教を開かれたお釈迦様の御遺骨（仏舍利）をお祀りした「塔」を意味する言葉です。その音写語が「卒塔婆」なのです。ですから「塔」という文字もみられますね。

インドにおいてストウーパは現存しています。しかし、図をみて分かるように我々が建てるお塔婆とはまったく違う形をしています。なぜ違うのか、その答えを知るには、仏教伝来の道順を考えなくてはなりません。仏教は日本に直接伝わってきたのではなく、中国を経て伝来しています。

中国においても、やはり仏塔（ストウーパ）は建てられました。しかし、インドの様な形ではなく、木造による楼阁建築と融合します。そして、三重・五重・六重・七重・九重・十重・十一重・十三重・十五重と多層化し、木造建築だとインドの様な円形の表現は難しいので四角・六角・八角・十二角の建物構造へと変化しました。この段階になると、我々が思い描く「○重の塔」という建物の姿に近づいてきたとも言えます。なお、インドの仏塔の頂上にあります

「傘蓋」が、中国においては「相輪」となって塔の頂上に設けられます。

日本においても、この中国の塔の流れを汲みます。層数で言えば三重や五重が主流になり、そして四角の構造が通例となり、相輪も飾りました。これがいわゆる「三重の塔」、「五重の塔」です。そして塔の中には、やはり初めは仏舍利が納められていましたが、時代が下るにつれて「経典」を納めることが一般化しました。

平安時代、塔に大きな変化が訪れます。この時代に弘法大師（空海）により密教がインド、中国を経て日本に伝わり、そして大師は真言宗を開かれます。その教えの中で「塔は大日如来の象徴である」という考えがありました。つまり、「塔」は「大日如来」であり、形は塔と仏様で違うけれども、仏様と深い、大切にしなさいということなのです。大日如来という仏様は、真言宗において中心となる仏様です。そして、時代が下るにつれ、塔と一口に言っても「多宝塔」、「五輪塔」など様々な形が現れてきます。しかし、そのいずれもが大日如来の象徴であると真言宗では考えるのです。

塔の中でも皆様に馴染みのある五輪塔は、平安時代後期から出現したと言われています。そして鎌倉時代以後、各地で多く建立されるようになりました。方形・円形・三角形・半月形・団形の五つを下か

ら順番に重ねたものが五輪塔と呼ばれます。多くは供養塔として建立されました。墓標に用いられたこともあったようです。塔の素材は多岐にわたりますが、多くは石造です。そして表面には「キャ・カ・ラ・バ・ア」という梵字を刻みます。この五輪塔を模したものが、実は今、お墓に建てられているお塔婆なのです。今のような板塔婆は鎌倉時代前半にその原型がすでに現れています。そしてお塔婆が数多く建立されるようになった背景には、真言宗の復興に尽力した興教大師こうきょうだいにしのご活躍がありました。今のお塔婆の上の方を良く注意して見れば五輪塔を模した切れ込みが入っているのが分かると思います。

では、五輪塔をお墓に建てるということは、いったいどういう意味があるのでしょうか。一つは「塔トウ」大日如来」なので、五輪塔を建てるということは大日如来様を造立することに相当するという事です。遙か昔から、仏様を造立することは大きな功德く徳（良いパワー）があるとされています。その功德をお墓に眠るご先祖様にも分けてあげて、仏様の世界での安らかなる生活と修行の成就をお祈りするので。もう少し詳しくみていきます。真言宗における回忌には、力を貸してくださいとさる仏様がそれぞれの回忌毎にいらっしやいます。例えば四十九日なら薬師如来様、三回忌なら阿弥陀如来様です。先述したように、お塔婆は大日如来様ですが、実は同時に回忌のご本尊様でもあるのです。

真言宗では非常に沢山の仏様にお祈り致します。しかしながら、実は沢山の仏様はすべて、大日如来様が姿を変えた仏様だと教えます。例えば、優しく諭しても聞かない人には、大日如来様が不動明王という怖い姿になって現れるのです。ですから、例えば三回忌のお塔婆は阿弥陀如来様でもあり、その根本の大日如来様でもあるのです。

ここまででお塔婆は仏様であるということとは分かって頂けたかと思えます。では、何時どのようにな、ただの板であるお塔婆が仏様になるのでしょうか。実は、真言宗には開眼作法かいげんさほうという作法が連綿と伝わっております。この作法を修することにより仏様の眼が開くのです。この作法を法事の時や、皆様にお塔婆を渡す前に修することで、初めてお塔婆が仏様となるのです。

地域によってはお塔婆を建てる前日にお寺に取りにいらっしやって、自宅に一晚泊してからお墓に建てる慣習があります。推測ですが、仏様であるお塔婆を一晚自宅に泊めることで、尊い仏様をおもてなしして、その善い力を分けて頂く為ではないでしょうか。そして、「泊める」という言葉には、知らずともお塔婆がただの板ではなく、「仏様」として扱ってきた歴史が垣間見えるような気が致します。

一口にお塔婆と言っても、これまで述べたようにインドから中国、そして日本に至る長い歴史と、込められた尊い意味があります。是非ともお塔婆を建ててお墓参りをされる際に思い出して頂けると幸いです。そして何かの折に他の人にもお伝え下さればと思います。